

● 九州

西田 紘子

2023年5月8日から、新型コロナウイルス感染症は、季節性インフルエンザと同じ「5類感染症」に位置づけられた。それに伴い、クラシック音楽公演における新型コロナウイルス感染拡大予防ガイドラインは廃止され、マスク着用などの感染防止対策は推奨レベルに引き下げられた。こうして本格的にポストコロナ時代へと入り、日常に戻ることに期待がふくらむ一方で、基礎疾患を抱えた人々などからは、コロナ前の生活様式にいきなり戻ることへの不安の声も聞かれた。

九州におけるクラシック音楽公演に目を向けると、声楽作品に対する制約、各種のコロナ・エチケットといった短期的影響からは解放され、海外音楽家・音楽団体の来日も増えた。コロナ禍に特化した地域自治体の各種助成にも、一定の区切りがあった。だが、客の戻りの悪い公演も少なからずみられ、長期的なダメージは計り知れない。しかし同時に、コロナ禍で得たハイブリッド公演のノウハウを継承したり、新たな活動を始めるきっかけをみつけたりしている音楽家・音楽団体もいる。

国際社会の先行きは不透明をきわめている。ロシアによるウクライナへの軍事侵攻から10月で600日を数え、戦況は長期化している。同月にはパレスチナ武装勢力とイスラエルの紛争が勃発した。こうした社会情勢もあわせると、クラシック音楽文化がこの数年で新たな局面に入ったのだという実感が強い。以下、福岡に焦点をあてて、2023年のクラシック音楽公演の動向を振り返る。

九州交響楽団（以下「九響」）は、2023年度に創立70周年を迎えた。これを記念して「感謝を、未来を、さあ奏でよう」と題したウェブサイトが開設された。これまでの歩みを音源とともに辿る年表や、「みんなで作る思い出のアルバム」の募集、楽団員が質問に答える「Q&A Question」、過去のフライヤーのアーカイブを公開している。Tシャツなどのオリジナルグッズを新たに発売し、地域の人々に愛着をもってもらおうという企画も展開中である。

2013年4月に音楽監督に就任し、楽団の演奏力向上を掲げてきた小泉和裕は、2023年度シーズンをもって任期満了となり、翌年度からは終身名誉音楽監督となる。20代の頃から九響と関わってきて、3年に及ぶコロナ禍を切り抜けてきた歴史的証人であるから、その勇退はまちがいない大きな節目となるだろう。

小泉が定期演奏会を指揮したのは、シーズン初めの第411回（オネゲル／交響曲第3番「典礼風」、ベートーヴェン／交響曲第3番「英雄」と、師走の第418回（ブラームス／ドイツ・レクイエム）。前者では、オネゲルが意図した作品の性格が現今の国際情勢と重なることもあり、響きに生々しさがあった。同じく宗教的 성격の強いドイツ・レクイエムは、九響合唱団と小泉の集大成として位置づけられた。2024年には、コロナのアウトブレイク（2020年）でやむなく中止となった東京公演が、鹿児島、熊本、福岡公演（第419回定期）とともに予定されている。

そのほか、小泉とのコラボレーションとは異なる顔を九響か

ら引き出した公演が、とりわけ印象深い。第410回定期では初登場となるユベール・スダーンがシューベルトの交響曲第8番「グレート」にひそむ愉悅を噴出させた。第412回定期ではパスカル・ロフェも初登壇し、フランス系プログラムで出色のソロを連発させた。福岡市出身の坂本彩・坂本リサによるプーランク「2台のピアノのための協奏曲」も、洗練と明晰を特徴とする好演であった。香港フィルハーモニー管弦楽団常任指揮者リオ・クオクマンによる「アメリカン・クラシック」と題した第413回定期は、インターネット配信を通して九州外にも届けられた。このように各公演が新たな発見をもたらし、近年レパートリー拡大を図る楽団の傾向を象徴するような一年であった。

今後も、未知の指揮者との反応のよいコラボレーションが、楽団の未来を切り拓いていこう。それとともに、社会に長期的に波及する教育プログラムなどを通して、地域における存在感を増していくことも期待される。2022年に新企画として始まった「マニティコンサート」は2023年も大好評であったほか、サマーコンサート「アニメ・コンチェルト」などでは、子供や育児世帯など通常公演にはアクセスしにくい層にもリーチした。2月に行われた久石譲指揮による特別演奏会「九響×センチュリー響」のように、楽団や地域の垣根を超えた企画も、ふだんとは異なる客層にアピールした。

地域連携をみてみよう。福岡県のAIR（Artist in Residence）事業が、日田彦山線沿線地域の東峰村と添田町で始まった。この事業は、2017年7月九州北部豪雨により被災したJR日田彦山線の沿線地域における地域振興を推進する取組のひとつ。九響コンサートマスターの西本幸弘および作曲家の宮川彬良のアドバイスのもと、全国から小鹿紡、須田陽、西下航平、林そよか、東秋幸の5人の音楽家が選ばれ、小中学校での演奏交流やミニコンサートを行った。音楽家育成と移住定住を促進する地域プログラムとして、波及効果が注目される。

ジュニアオーケストラの交流も活発化した。9月には熊本県立劇場などで「北部九州ミュージックキャンプ」が開催され、福岡ジュニアオーケストラ（福岡）、iichigoグランシアタ・ジュニアオーケストラ（大分）、熊本ユースシンフォニーオーケストラ（熊本）、アルカスSASEBOジュニアオーケストラ（長崎）のメンバーが集結した。県を越えた合同オーケストラの演奏交流は、未来の人材を育む土壌になりそうだ。

節目のホールもある。音響の良さに国内外から定評のある響ホールは、2023年で開館30周年。「新時代へ！」をキャッチフレーズとした北九州国際音楽祭の重要な拠点となったほか、7月末に催された記念ガラ・コンサートでは、北九州市から羽ばたいた篠崎史紀、又紙正哉、岩倉万希子、南紫音、田中香織、長哲也の6名をはじめ、ホールと絆の深い音楽家が集結してその歩みを祝った。このホールを中心に活動を続けてきた響ホール室内合奏団も創立25周年を迎え、稀少性と独自性のあるプログラムで本年もたしかな存在感を發揮した。同じ室内合奏団である長崎OMURA室内合奏団も結成20周年。年を追うごとに活動の幅を広げている。

ほかにも、現代音楽から古楽まで、個々の公演から各地域の音楽祭まで、復活と活性化の動きが続いた。それぞれが個性を保ちつつも横につながっていくような動きが強まると、地域やジャンルを超えた展開がさらに生まれそうだ。